

〈SDGs 行動の10年 共に未来をつくる〉

創価学会と ITTO（国際熱帯木材機関）の共同プロジェクト

—西アフリカ・トーゴ共和国 森林再生支援進む—

2021年10月29日

セシル・ンジェベト代表：コミュニティ森林経営のためのアフリカ女性ネットワーク

コミュニティ森林経営のためのアフリカ女性ネットワーク
セシル・ンジェベト代表



カメルーン出身。農学者。森林再生や女性の権利促進の分野に30年以上にわたり従事。2009年にREFACOFを創設。持続可能な開発のための国連女性メジャーグループの一員として、地域と世界を結ぶ活動にも尽力する

国連のSDGs（持続可能な開発目標）達成推進と気候変動対策の一環として、創価学会とITTO（国際熱帯木材機関）が昨年に締結した、西アフリカ・トーゴ共和国における森林再生支援プロジェクト。本年1月から、同国の貧困地域で生活する女性たちが担い手となって活動を進めている。プロジェクトの監督を務める「コミュニティ森林経営のためのアフリカ女性ネットワーク（REFACOF）」のセシル・ンジェベト代表に話を聞いた（聞き手＝南秀一）。

——本年はどのような取り組みを実施してきたのでしょうか。

はじめに、創価学会の皆さまの温かいご支援に心から感謝を申し上げます。プロジェクトでは、その地域に生息する木々から苗木を育て、植樹するための技術を学びます。そして生態系を傷つけないよう留意しながら、その苗木を「アグロフォレストリー」と呼ばれる手法で植えていきます。これは、森を切り開いて畑をつくり、農作物を栽培する従来の手法と異なり、農作物や果樹、材木樹など多様な植物を混植することにより、森林の保護・再生を支えながら商品作物を得られるようにするものです。植樹された木々が温室効果ガスを吸収することで気候変動対策になると同時に、安定した収入を確保することにつながると期待されています。主に、貧困地域に暮らす女性たちが活動の主体となっており、本年は100人が参加しました。新型コロナウイルスの感染拡大による影響も受ける中でしたが、本年は約3万本の苗木を植えることができました。参加した女性たちのほとんどは、生産手段も財産も持っていません。プロジェクトでは森林伐採が進む地域での植樹を推進するとともに、貧困地域の女性たちが手に職を付け、経済的に自立することを支援しています。

——プロジェクトの参加者からは、どのような感想が寄せられていますか。

非常に大きな反響があり、中には「長年の夢がつかないかな」といった声も寄せられています。私たちが暮らす地域は豊かな文化を有していますが、家父長制の伝統が色濃く残っている面もあり、とりわけ土地や財産に関する女性の権利については、一般的にあまり認められていません。結果、女性の自立が阻まれてきた部分があります。一方、家事や育児等を通して家庭・地域を支えているのは多くの場合、女性であり、貧困や飢餓、環境保全など、社会全体に関わる課題を克服するためには、彼女たちが力を持つことが不可欠です。そうした背景から2009年、森林再生における女性たちの役割や課題を取り上げ、この分野でジェ

ンダー平等を推進するために、REFACOF を設立しました。現在、西アフリカ、中央アフリカ地域など 20 カ国で活動しています。女性たちが土地を所有する権利を法律に明記するよう各国で呼び掛けるとともに、地域機構や国連などとも協働して、彼女たちが直面する課題を政策決定の場に届けるプラットフォームの役割を担っています。

——ジェンダー平等の推進は貧困・飢餓の根絶、気候変動対策など、さまざまな分野と深く関わるのですね。

その通りです。私たちはとりわけ、取り残されがちな地域で暮らす女性たちのエンパワーメント（権利付与）に焦点を当て取り組んでいます。まず、生活手段としての技術を得ること。それにより収入を得、経済的に自立を果たすこと。そして経済的に自立することで、社会の意思決定に関わる機会を得ることです。その意味からも、創価学会と ITTO の支援によってトーゴで始まった本プロジェクトは、同国だけでなくアフリカ全体にとって大きな意義を持ちます。SDGs でいえば、目標 1 の貧困、2 の飢餓、3 の健康と福祉、5 のジェンダー平等、8 の働きがいと経済成長、13 の気候変動、15 の陸の豊かさ、17 のパートナーシップと、非常に幅広い目標達成に寄与するものです。また、2019 年に始まった国連の「家族農業の 10 年」、さらに本年から始まった「生態系回復の 10 年」の推進にも資するものであるといえます。今後トーゴでは、プロジェクトを経験した女性たちが別の地域を訪れ、他の地域の女性たちがどのような課題を抱えているのか互いに体験を共有し、学び合う取り組みなども実施していきたいと考えています。

——間もなく、地球温暖化対策の国連の会議「COP26」がイギリスで始まります。気候変動は西アフリカ地域において、どのような影響を及ぼしているのでしょうか。

気候変動対策、ジェンダー平等を推進
豊かな生態系と暮らしを守る



創価学会とITTOの共同プロジェクトとして、西アフリカのトーゴで行われている森林再生支援プロジェクト

先日訪れたカメルーンのある村では、今年は雨期を迎えてもなかなか雨が降らず、乾期が数カ月も長引いた結果、一部の川が干上がってしまいました。一方で今夏、豪雨による洪水で大規模な被害を受けた街があるなど、影響は年々顕著になっています。何より、気候変動は食料生産に甚大な被害をもたらします。2 カ月も雨が降らなくては作物は枯れてしまう。その意味で私たちは、飢饉の脅威と隣り合わせの生活を余儀なくされています。私たちが植樹の取り組みを行っているのも、環境保全のためだけではなく、生き残るために気候変動を食い止めなければならないからです。このまま気候変動が進めば、一部の国は世界地図から消えてしまう可能性があります。気候変動は“生存を懸けた戦い”であると認識するべきです。皆が協力して必要な資源を投入し、対策をしなければなりません。心強く思うのは、青年世代がこの問題に強い関心を持っていることです。アフリカと日本の青年たちが力を合わせて、この危機を打開して欲しいと願っています。